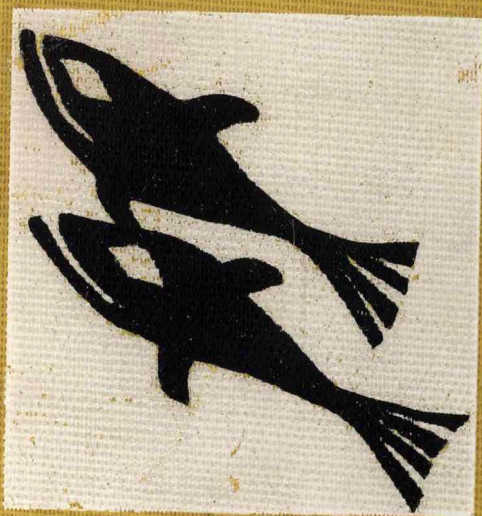
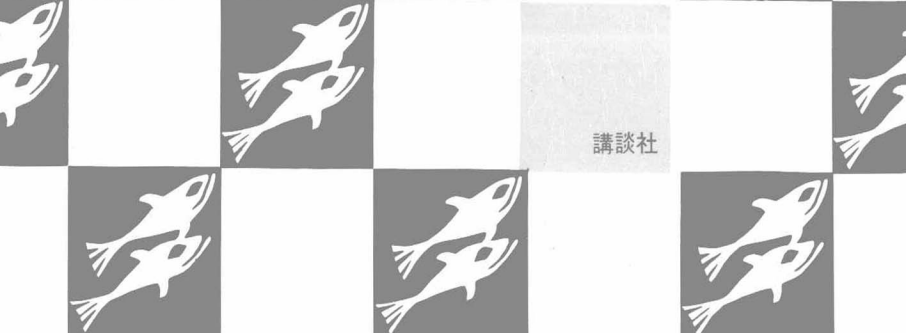


幽霊達の復活祭■大庭みな子



幽霊達の復活祭＊大庭みな子



講談社

幽霊達の復活祭

昭和四十五年七月十五日 第一刷発行

著 者 大庭みな子

発行者 野間省一

発行所 株式会社講談社

東京都文京区音羽二―一二二 郵便番号・一二二

電話・東京(九四二)一一一一(大代表)／振替・東京三九三〇

印刷所 豊国印刷株式会社

製本所 黒柳製本株式会社

定 価 五一〇円



落し本・乱し本はお取り替えます。

© Minako Ohba 1970 Printed in Japan

目次

幽霊達の復活祭

7

火草

45

栈橋にて

99

首のない鹿

151

あいびき

171

収録作品目録

236

装帧
田村義也

幽霊達の復活祭

幽霊達の復活祭

司教は三角の顎鬚を生やしている。黒繻子の布切れの端をほどいてきれいに撫でつけ、糊で唇の下に貼りつけた、という感じである。肌は岩陰に佇んでいる青味を帯びた魚の肌を想わせた。茶色い眼は透明に澄んでいたが、大層機敏に動き、澄明な中で交錯する綾があった。唇は桃色に近く、何時もいくらか濡れていた。体つきは少女のようにほっそりとしていて、手の甲なども剛毛が少く、爪の形も華奢だった。

大層な秀才だということである。

レンが司教をずっとみつめていると、クワヌーワイは淫らな空想をした。嫉妬というのはなかった。一種の愉悅であった。司教の明るい茶色の眼が伏眼勝ちにレンの豊満な胸の窪みの辺りをさりげなく通りすぎ、そのしなやかな二の腕を通り過ぎて、再びレンのいくらか腫れ臉の切れ長の眼に戻ると、揶揄に近い嗜虐的な想いが、復活祭の為に飾りつけた百合の花びらの中側に纏りつく金色の花粉のようにクワヌーワイの心の中にひろがるの

である。

レンはよく食べた。少し肥り始めてはいたけれど、まだ肥りすぎた、という程ではなかった。脂ののり始めた魚、という感じで、時々、くつくつと笑うのが喉の途中でからまるように消えて、司教がその艶にじっと眼を伏せているのがわかって、クワヌーワイは嬉しかった。

クルゾフ夫人は腰のまわりに大きなリボンのついた藤色の裾の長いドレスをしゅつ、しゅつと絹ずれの音をさせて、夫によりそうようにして歩いた。公証人の夫は真白な髪を北斎の波模様のようにカールさせ、紫の支那緞子のチョッキに鼠色の上衣を着て、縞のズボンをはいていた。サテンの牡丹の花のようにぼつとりとした胸飾りをして、唇を真黒に染めてキャビヤを食べていた。クルゾフ夫人はその夫の黒く染った唇を見て、そのことは別に注意はしなかったが、その夫の唇が鏡でもあるように、わずかに眼を細めて、ナプキンを軽く口にくわえるようにして自分の唇のしめりを拭いとった。

クワヌーワイは真実こめてクルゾフ夫人に笑いかけた。クルゾフ夫人はもうかれこれ六十になるだろうと思われたが、その白金色の豊かな髪の下の額はまだ充分に艶やかで、明かるい蒼い眼にはそれでもいくらか濁った赤い筋が走り始めてはいたけれど、その昔、随分美しかったであろうと想わせるに充分な艶めいた翳があった。クワヌーワイは美しい年

老いた女達が、若い男の真実の笑いを浅はかにも動物的なまでに好むことを知っていたので、自分の笑いに誘発されてクルゾフ夫人の眼が消えかけた燦がぱつと炎をあげた時のように輝くのを見ると、神妙にも静かに眼を伏せ、

「月の美しい、静かない復活祭ですねえ」と囁くように言った。

クルゾフ夫人は、クワヌーワイのそういう静かな物腰が好きで、この四分の一北極人の血の混った若い男が、その昔、恋人のように愛していた失った息子の生れ代りであるような気さえしてくるのである。

「ほんとうに、こんなに波の静かな、こんなに月の美しい夜は、滅多にありやしませんよ」そう言いながら彼女は二インチぐらい傾いた床の上を優美に泳ぐように窓際に歩みより、象牙の彫のある支那扇で胸元をかくすようにしながら、光る黒真珠の海を見やった。

彼女はその年には不似合に濃厚な、上等な香水をつけていた。彼女は未だに驕慢な美しい女であり、男達に自分の過去を振返らせずにはおかない執拗さがあった。クワヌーワイはその執拗さにうんざりしながらも、それを無視するには哀れすぎる邪氣の無さを、クルゾフ夫人がいまだに持っているのに黙って眼を閉じた。クワヌーワイは自信家で、少女から老婆に至るまで、どんな女にでも、その年齢に相応した魅力を見つけ出すのは簡単だと考えていた。実際女達は、それぞれに、男達の知らない物語を持っていた。

クルゾフ夫人は身だしなみのよい男が好きであつた。礼儀正しい、目鼻立ちの整つた男が好きであつた。

タヌーワイは愛嬌になる程度の美しい八重歯を持つていたので、齒の手入れはよくゆきとどいていた。この八重歯は北極人の特徴である。口元を軽く閉じた時、その八重歯の爲に、上唇がいくらかめくれ上るのを彼は意識し、反つた睫や、大きな張りのあるやや吊り加減の、光の強い眼が女達に氣に入られることをよく知つていたので、女達の揺らぐ眼を、ゆっくりと大魚が小魚を追うように追いかけるのである。そういう風に彼にみつめられて全く興味を示さない女は殆ど無いといつてよかつた。彼女達は心が揺らいだことを上手にかくそうとするだけであつた。彼は何時ものように一渡り女達の顔ぶれを見まわし、指先だけで粘土で簡単なスケッチをとるように女達の姿態を捏ね上げた。

パーティは礼拝堂の隣の僧達の溜り場の部屋の家具を動かしてとのえた広間で行われていた。だだっぴろい寒々とした部屋である。その昔、孤児達を収容する部屋だつたそうである。二インチも床が傾き、壁はところどころ落ちたり、ひび割れたりして、ゴブラン織のカーテンは壁を型どつた縞になつて色褪せていた。ひび割れた壁には、日の神、この寺院を建てた帝政ミンカの女王、歴代の司教の肖像画が飾られていた。殆ど灰色に変色した金の額縁にはめられた聖画は、トルコ石の青と、薔薇色の色調の強い日の神の肖像画で

ある。美しく波打った金色の長い髪と鋭い眼を持った日の神で、頭は、薔薇色の虹のような輪でつまれていた。その薔薇色の輪を、抱きかかえるように両手を拡げている赤子の天使の眼には陰があつて、何処か怒ったような表情があつた。何時ものことだが、クッヌーワイは一体天使の肩のところから翼の生えている部分はどうなっているであろうと思ひ、画面を覗き込んだが、その部分は描かれていなかった。つまり、ケロイドのようなものに違ひない、と思ひ、その部分だけを大理石で彫つて「疑い」と題して展覧会に出せば、ひとは誰も何かわからないから、表現された形だけから、案外彼の哀しみを解ってくれるかも知れない、と思うのである。

ラテン・アメリカの若い神父の妻、パーセラはざっくりと首筋のあたりで切りそろえた濃い栗色の髪をその聖画の胸の辺りにすり寄せるようにして、まるで秋口の蛾のようにうら淋しげにひっそりと立っていた。見下ろしている日の神には情熱はなくて、厳めしい、高圧的な、気品のようなものがあつた。

「つまり、革命という言葉なんぞが無かつた時代ですね。この聖画は——」クッヌーワイはミンカ人のクルゾフに言った。

「そのようですね。もっとも時代によって言葉の意味はかわるものだから、——そしてさまざまな違つた響きの新しい言葉が創られるものだから——、現代においては革命という

言葉は輝かしさを失ったようですね」クルゾフは栗色の鬚を撫でながら言った。

「そんなこともないでしょう。僕などにとつては、まだ音をたてて流れている輝いた水みたいなきらびやかな響きがありますね」

「なる程、きらびやかな響きがね」クルゾフは言った。

「ところで、あなたはターニャの歌にバラライカの伴奏をつけるそうですね」クルゾフはこの寺の聖歌隊の指導をしているターニャというミンカ生れの得体の知れない流れ者の女に、いくらか興味を持っていたので、ターニャにまつわりつく男は全て気になるのである。司教、助祭、下っ端の神父に至るまでターニャのまわりにいる男達を監視する為には彼は屢々彼の文化財保護管理委員という肩書を利用した。

クヌーワイは頷いた。

「ええ、ええ、まあ、いんちきなものなんだけれど」

「そりゃいい。わたしはごく小さい時にミンカの革命で、ピータースバーグから、バベルに逃げて、殆ど何も覚えていないけれど、ただバラライカの音だけは覚えてるんです。

だから、何という理由もなく時々ききたくなる。殊に、こういう静かな晩には」彼もターニャと同じくミンカの生れであったので、何時か二人だけでひっそりと彼女も亦知っているにちがいない共通の思い出話をしたいと思っているのに、ターニャはなぜかその話にな

ると口を閉じて語りたがらない。

ラテン・アメリカの神父が、僧衣の袖を蝙蝠のように翻してやってきた。

「皆さん、わたしは今日大層面白い童話を読みました。ラテン・アメリカの民話なんです——」

「なに、なに、ラテン・アメリカがどうしたって？ 地震のお話？」ターニャが首をつつこんだ。「或る地震学者の予言によると、ラテン・アメリカの何処かが震源地で、来年の六月独立祭頃アングロ・アメリカの一部が、恐らくはこのサルモン島が海の底になるそうですよ」

「いや、いやちがう。地震の話じゃない。狐ともぐらの話だ」

「狐ともぐら？ ——」

「狐ともぐらが森に棲んでいました。二人は大変性質が違っていましたが、それだけに却ってよい友達でした。毎日、往ったり来たりして仲良く暮していました。ある晩、新月の美しい晩でした。狐がもぐらのところにやって来ていうには、『もぐら君、一体、君の一番の願いというのは何だね』狐は美しい青白い新月を、森の木の梢の間に見上げて言いました。

“そうだなあ”

もぐらはしばらく考えこみました。木の葉が一枚ひらひらと枝の間を舞いおちて、狐の鼻のあたまととまりました。"そうだなあ、もうそろそろ秋も近づいて来たし、芋虫もだんだん少くなってきた。冬中ゆっくりもう働かずに暮せるだけの芋虫が穴蔵いっぱい欲しいねえ"

もぐらは小さな眼をしょぼしょぼさせて、狐の濡れた鼻の頭にはりついた枯れた木の葉を眺めながら言いました。

"ふうん"

狐は青白い月を眺めて眼を細めながら前足で鼻先の木の葉を払いのけました。

"で、君は一体、何が欲しいんだい"

"そうだなあ"

狐は膝を組んで夢見るような眼つきで言いました。

"僕は、あの月に行きたいのさ"

"えっ、雉子が腹一杯喰いたいと言ったのかい"

もぐらは少し耳が遠いので、訊き返しました。

"いや、月と言ったんだ。あの美しい娘の横顔みたいな月の世界にいつて住みたいのさ"

狐は蔑んだ眼付きでもぐらを眺め下ろして言いました